

後期の詩における T. S. エリオットの内面葛藤の克服

T. S. Eliot's Conquest of Mental Conflict in His Later Poems

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成18年10月2日受理)

“The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910-11) から *The Waste Land* (1922) に至る T. S. エリオットの初期の詩は、語り手の自虐や風刺などを伴う言動によって人間社会の醜悪な側面を描写している。しかし、この描写が余りにも強調されているために、そこから浮かび上がってくるのは生き方について悩み苦しむ彼の姿である。彼は “Tradition and the individual Talent” (1919) の中で、“the more perfect the artist, the more completely separate in him will be the man who suffers and the mind which creates; ...” (54) と述べているが、この発言は実生活の人間の探求をことさら避けようとする意図が感じられる。そこで、母親 Charlotte Champe Eliot に焦点を当てて初期の詩を検討した結果から明らかになるのは、彼女の家庭教育を素直に受け入れずに深く苦しんだエリオットの姿である。¹

では、*The Waste Land* 以降の後期の詩の中でエリオットはそうした内面葛藤をどのようにして克服したのであろうか。本稿でも母親を敬愛するエリオットの思いを視野に入れながら、後期の代表的な三つの詩——“The Hollow Men” (1925), *Ash-Wednesday* (1930), *Four Quartets* (1943)——を取り上げて、この問題を考えていきたい。

1

エリオットの後期の詩を創作順に考察するために、“The Hollow Men” から論述することにする。この詩の冒頭は次のように書かれている。

We are the hollow men
We are the stuffed men
Leaning together
Headpiece filled with straw. Alas! (83)²

この場面では二つのイメージが提示されている。それは、精気のない惨めな人間の姿と、生きがいを見出せない自分を嘲笑する人間の姿である。こうした二重の人物描写を理解するために、この詩のエピグラフ “*A penny for the Old Guy*” (83) に目を向けてみよう。エピグラフの中の “*the Old Guy*” は Guy Fawkes (1570-1606) を指している。彼は仲間たちと一緒に、国会議事堂を火薬で爆破して、カトリック教徒迫害の復讐をしようとし

た。しかし、彼は1905年11月5日に逮捕され、翌年に処刑された。この火薬陰謀事件 (Gunpowder Plot) に因んで、イギリスでは毎年11月5日に、ガイの人形が作られ、夜に焼かれる。当日の夜に花火を打ち上げるお金を集めるために、子供たちは“A penny for the Guy?”と叫びながら、ガイの人形を町中に引き回すのである (Southam 209)。この詩のエピグラフは子供たちの言葉を借用したものである。そこで、“We”の惨めな姿は爆破決行の前に逮捕され死んだ哀れなガイを思い起こさせるし、“We”の滑稽な姿は帽子にわらを詰め込まれたガイの奇抜な人形を思い起こさせる。

“The Hollow Men”は次のような場面で終わっている。

*This is the way the world ends
This is the way the world ends
This is the way the world ends
Not with a bang but a whimper.* (86)

この光景は、花火が打ち上げられて、ガイの人形が焼かれる様子を連想させる。語り手は読者に、哀愁と自嘲を感じさせて、空しい現実の社会を印象づけようとしている。そうすると、“We”の惨めな姿はそうした現実社会を伝達するためのイメージであり、“We”の滑稽な姿はその伝達を促すためのイメージである。

エリオットは、“The Hollow Men”が自分の最後の詩であると思った (“To Marianne Moore,” 31 Jan. 1934; Lehmann 5)。彼のそうした思いが、この詩の自虐的な表現描写に反映されていると言える。

なぜエリオットはこのように自虐的な表現描写をしたのであろうか。彼の人生を参考にしながら、この問題を検討してみたい。彼は、母校のハーバード大学から在外研究奨学金を与えられ、オックスフォード大学のマートン・カレッジ (Merton College) へ入学して哲学の勉強をする。しかし彼は、この国での生活に馴染めず、些細なことに悩んでいる (“To Conrad Aiken,” 30 Sept. 1914, *The Letters of T. S. Eliot* 58-59)。彼はまた、第一次世界大戦の重苦しい雰囲気のためにイギリスが好きになれないし、ハーバード大学の教師たちの存在が重くのしかかり、³同大学へ戻ることもためらっている (“To Conrad Aiken,” 25 Feb. 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 88)。その一方で、母親は息子が母国で大学の職へ就くことを望んでいる (“To Bertrand Russell,” 23 May 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 139)。

エリオットは、友人のエイケンから勧められて、当時イギリスで活躍していたアメリカ人の詩人 Ezra Pound 宅を訪問する。自作の詩を出版したり雑誌に掲載したりする労をとってくれるパウンドの影響を受けて、彼は文学の仕事に専念することを考えるようになる。その結果、当時の彼が直面した苦悩は少なくとも次の3点であろう。それは、①イギリスに定住すべきか、アメリカに帰国すべきか、②文筆の仕事か、哲学の研究か、③自由意思の尊重か、両親への従順か、である。

人生の進路に悩んでいた頃に、エリオットはイギリス人 Vivienne Haigh-Wood と知り合い、1915年6月26日に電撃的な結婚をする。父親へ宛てた同年7月23日付の手紙の中で、彼女がこれからの人生を導いてくれる女性であることを書き綴っている (*The Letters of T. S. Eliot* 110)。その後彼がイギリスに住んで文筆の仕事を選択したのは、彼女の存在が大きかったのである。しかし彼は、ヴィヴィアンには生来の神経症による精神異常な一

面があることを実感して、将来の人生の不安も抱くようになる。そのことは、“Hysteria” (1915) や “Ode on Independence Day, July 4th 1918” (1918) の中で暗示されている。⁴

エリオットは、1917年からのロイド銀行 (Lloyds Bank) の勤務と1922年からの雑誌 *Criterion* の編集長の両立に苦しんだり、ヴィヴィアンの病気の看病や治療代の工面に苦しんだりした。彼は、1923年3月12日に John Quinn へ出した手紙の中で、疲れ切って、先へ進むことができないと書いている (Reid 582)。ラッセルへの1925年5月7日付の彼の手紙の中で、ヴィヴィアンとの別れが明言されている (Russell 174)。また、Paul Elmer More への1933年5月18日付の彼の手紙の中で、結婚生活の失敗が告白されている (Paul Elmer More Papers)。これらの出来事が原因となって精神的・肉体的な苦痛はいっそう深まり、ついに彼は1925年の詩についての発言をしたのである。

ところで、エリオットは現実の社会の空しさだけに直視しているのではないように思われる。“Doris’s Dream Songs” が1924年11月発行の雑誌 *Chapbook* に掲載された。そこには次のような詩行が見られる。

Eyes that last I saw in tears
Through division
Here is death’s dream kingdom
The golden vision reappears
I see the eyes but not the tears
This is my affliction. (36)

語り手は、最愛の女性と別れる苦しみを示唆している。彼女と住む現実の世界は、“death’s dream kingdom”，つまり活気のない索漠とした死の世界であると暗に表明されている。彼は、現実の世界とは違う理想の世界にいる女性を夢見ているのである。したがって、「目」は彼の理想化した女性を象徴している。この描写は、妻と離別して心の支えを求める彼の苦悩を示唆していると言えよう。

上の詩行に見られた「目」の描写が“The Hollow Men”では次のように書かれている。

Eyes I dare not meet in dreams
In death’s dream kingdom (83)

Sightless, unless
The eyes reappear
As the perpetual star
Multifoliate rose
Of death’s twilight kingdom
The hope only
Of empty men (85)

“death’s twilight kingdom” は、生氣のない死の世界のような現実社会を表す “death’s dream kingdom” を言い換えた表現である。“Sightless ... kingdom” の詩行は、中世イタリアの詩人 Dante Alighieri の *Divine Comedy* (*Inferno*, *Purgatorio*, *Paradiso* の3

部構成)の影響がある。Manju Jain の指摘によれば (208), バラや生气のある星は聖母マリアとして言及され (*Paradiso* 23), “Multifoliate rose” は永遠の白いバラであり, 祝福された人々のいる花びらの中心に聖母マリアが座している (*Paradiso* 31)。理想の女性であるベアトリーチェ (Beatrice) と再会したとき, ダンテは彼女の導きによってこれらの神々しい天国のヴィジョンを直視する。そこで, エリオットの描く「目」には, この聖母の姿が暗に映し出されているのである。

1928年の懺悔火曜日 (Shrove Tuesday) に出したモア宛の手紙の中で, エリオットは人間の幸福や人間関係の真ただ中に空虚があると述べている (Paul Elmer More Papers)。彼のこの気持ちが “empty men” に暗示されているであろう。

したがって, 人生において虚無感を抱くエリオットは, ダンテの場合に倣って, 新しい人生を導いてくれるベアトリーチェのような理想の女性を希求しているのである。

2

後年, エリオットに詩人としての転機が訪れる。彼はそのことを次のように述べている。

... and it was only because my publishers had the series of ‘Ariel’ poems and I let myself promise to contribute, that I began again. And writing ‘Ariel’ pieces released the stream, and led directly to ‘Ash Wednesday.’ (Lehmann 5)

彼は, 当時の Faber and Gwyer 社 (現在の Faber and Faber 社) から「エアリアル」詩集の企画のためにクリスマス用の詩の執筆を依頼された。それをきっかけにして, 人間の精神的再生を主題にした4つの詩——“Journey of the Magi” (1927), “A Song for Simon” (1928), “Animula” (1929), “Marina” (1930)——が発表された。⁵

人間の精神的再生の描写をさらに推し進めたのが *Ash-Wednesday* であった。エリオットは, この詩を出版した直後の1930年6月2日付の手紙の中でモアに次のように書き留めている。

My only original contribution is possibly a few hints about the Vita Nuova, which seems to me a work of capital importance for the discipline of the emotion; and my last short poem, “Ash Wednesday” is really a first attempt at a sketchy application of the philosophy of the Vita Nuova to modern life. (Paul Elmer More Papers)

Ash-Wednesday は, エリオットがダンテの *Vita nuova* から学んだ情緒の訓練を現代生活に当てはめた詩であった。それは, 彼が1930年の詩の中で精神的再生を希求したことを暗示する。

Ash-Wednesday では, その情緒の訓練がエリオット自身の生活にどのように反映しているのだろうか。ここではその一端を考察してみたい。

この詩の第2部には次のような場面がある。

Lady of silences

Calm and distressed
 Torn and most whole
 Rose of memory
 Rose of forgetfulness
 Exhausted and life-giving
 Worried reposeful (91)

第2部は1927年に単独で発表され、“Salutation”という題名が付いていた (*Saturday Review of Literature* 429)。この題名は、*Vita nuova* 第3章でベアトリーチェがダンテに行った会釈に基づいている (6-7)。彼はこの会釈に対して恩寵を感じるので、“Rose”はベアトリーチェに暗に言及しているであろうし、また、沈黙して静寂さに包まれた“Lady of silences”は彼女を下敷きにしているであろう。この聖女を表現する語に注意を払ってみよう。4つの語 (“distressed,” “Torn,” “Exhausted,” “Worried”) は、われわれの罪深さが彼女に与える苦痛を示唆している。他の4つの語 (“Calm,” “most whole,” “life-giving,” “reposeful”) は、その罪深さを広く受け入れる彼女の包容力を示唆している。われわれは、彼女を時には記憶することもあれば時には忘れることもある。その行いが “memory” と “forgetfulness” にほのめかされているのである。

第2部で聖女が描かれている他の場面に言及してみよう。

Grace to the Mother
 For the Garden
 Where all love ends. (92)

これは先の引用文の少し後に書かれたものである。“Lady”が“the Mother”に言い換えられている。“the Garden”は、たとえばダンテの「天国篇」第31歌でうかがわれる天国の庭を思い出させる。そこは、俗世界への愛が断ち切られた所である。

このように見ると、ダンテのベアトリーチェ像を参考にして、エリオットはわれわれの精神的再生の取りなしをしてくれる理想の女性像を描いている。

その一方で、“the Mother”という語はエリオットの母親を連想させることも無視できないであろう。そこで、上の二つの引用文への母親のかかわりを検討してみることにする。

大学生の彼は1910年10月から1年間遊学のためにパリへ旅立っている。それは当地で本當の詩を学ぶためであった (“What France Means to You” 94)。しかし、彼の両親は当初この遊学に反対であった。とりわけ母親の反対が強かったのは、彼女が息子へ出した1910年4月3日付の手紙から理解できる (*The Letters of T. S. Eliot* 13)。母親は、息子の行動がエリオット家の家訓 (公共への義務、慈善、立派な仕事) (Pritchett 73) から逸脱したものと考えたからであろう。彼女は、息子とヴィヴィアンの結婚を優生的によくないと判断して好ましく思わなかったし (Ackroyd 144)、雑誌の編集長としての彼の仕事も辞めることを望んだ (Ackroyd 125)。その上、彼は、母親の希望とは違って、母国に戻って大学教授に就く道を選ばなかった。このような出来事による彼女の心痛が、先の4つの語 (“distressed,” “Torn,” “Exhausted,” “Worried”) に盛り込まれていると言えよう。

エリオットがミルトン・アカデミー (Milton Academy) に通っていたとき、母親は校

長に息子の健康が損なわれないように1905年9月末日と翌年5月20日に手紙を出している (*The Letters of T. S. Eliot* 11-12)。1910年5月に猩紅熱の疑似患者が出たために息子も入院させられたと聞いて、母親は早速彼の見舞いに行っている (Ackroyd 40)。このような母親の心遣いが、先の4つの語 (“Calm,” “most whole,” “life-giving,” “reposeful”) に含まれているであろう。

上の論述を踏まえると、“the Garden” は子供時代に母親と一緒に過ごしたセントルイスのエリオットの生家をそれとなく指しているであろう。彼が1925年5月7日付のラッセル宛の手紙で妻との離別を考えていた。このことが “all love ends.” に暗に反映されているであろう。

このように考えると、上の二つの引用文の表現内容から新たに読み取れるのは、エリオットが母親をヴィヴィアンと別れた後の人生を導いてくれる聖女として描がいていることである。1929年8月3日にモアへ宛てた手紙の中で、長い旅が始まったばかりのとき、安楽いすにくつろぐつもりはないと表明している (Paul Elmer More Papers)。この手紙の内容から判断して、彼は大変固い決意で人生の再出発をしようとしているのである。

このようにして、“The Hollow Men” でわずかに感じられたエリオットの理想の女性が、*Ash-Wednesday* でもう少し鮮明に浮かび上がってくる。その理想の女性は彼の母親であると言えよう。

母親は1929年9月に死去する。その直後に出版された *Dante* (1929) では次のようなことが書かれている。

The system of Dante's organization — the contrast between higher and lower carnal love, the transition from Beatrice living to Beatrice dead, rising to the Cult of Virgin, seems to me be his own. (66)

ここで注目されるのは、高次の肉欲的愛、死んだベアトリーチェ、聖母マリア崇拝である。これらの事柄をエリオットと母親の関係に結びつけてみると、そこから浮き彫りにされるのは、聖母マリア崇拝のように、死んだ母親への彼の崇高な愛である。

このことを考察するために、母親の死去の後に脱稿された *Ash-Wednesday* の次のような場面を見てみよう。

Blessèd sister, holy mother, spirit of the fountain, spirit of the garden,
Suffer us not to mock ourselves with falsehood
.....
Sister, mother
And spirit of the river, spirit of the sea,
Suffer me not to be separated (98-99)

聖母マリア崇拝に基づいて、懺悔の祈りがさまざまな対象に呼びかけるエリオット流の表現で描写されている。さまざまな対象は彼にかかわりのものばかりである。“Blessèd sister, holy mother” と “Sister, mother” は、聖女としての母親へ暗に呼びかけられている。“spirit of the fountain” は、エリオット家の別荘から見られた泉⁶を下敷きにしていると判断される。“spirit of the garden” は、エリオットの生家の庭を踏まえている

と言えよう。“spirit of the river” は、生家の近くを流れていたミシシッピー河⁷を連想させよう。“spirit of the sea” は、エリオット家の別荘から見渡されたニューイングランド地方の海を暗に示唆しているように思われる。そこで、彼は母親を中心とした静寂な世界を形成しているのがわかる。

1930年4月24日に限定出版された *Ash-Wednesday* には“To My Wife”という献辞が付いていた(9)。この事実から推察すると、“us” がエリオットとヴィヴィアンをそれとなく指すのであれば、“Suffer us not to mock ourselves with falsehood” は、われわれ二人がそれぞれ間違っただけの考えを抱かないようにという彼の祈りであると解釈できよう。

上の最終行は、母親と自分との強い絆を断つことがないように渴望するエリオットの切実な叫びを間接的に伝えているであろう。

3

Four Quartets は四つの詩からの構成となっている。最初の詩が“Burnt Norton”(1935)である。この詩の題名となっているバート・ノートンは、イギリス南西部のグロスターシャー(Gloucestershire)にある古い荘園の名前である。エリオットは1934年から数回この荘園を訪れている。彼はそのときの体験から得た詩想を次のように書き綴っている。

What might have been and what has been
Point to one end, which is always present. (172)

“What might have been” は過去に起こったことの反対の出来事の推測である。“what has been” は実際に起こった出来事である。相反する二つの出来事はいつも存在する同じ地点に向かうという。

その地点が“the still point of the turning world”(173)と表現されている。“the turning world” は毎日の生活に明け暮れる人間社会を暗に指している。その人間社会を凝視すると、われわれの心を引きつける「静止点」がある。この地点が次のように説明されている。

I can only say, *there* we have been: but I cannot say where.
And I cannot say, how long, for that is to place it in time. (173)

The inner freedom from the paractical desire,
The release from action and suffering, release from the inner
And the outer compulsion,... (173)

われわれは、相反する二つの出来事にとらわれないようにすると、一般的に考えられる概念(具体的な場所や時間)に執着しないようになる。その結果、われわれは、欲望、行為と苦しみ、心の内と外への強制から解放されることになる。

このように、エリオットの体験を表現する詩行から、人生論を読み取ることができよう。

その一方で、1935年の詩にはエリオットの個人的な事柄も含まれているように思われる。その点について考えてみたい。

結婚して2年後のエリオットが母親に出した1917年10月24日付の次の手紙を見てみよう。

There are so many things I don't like to think of, because I think often that I used to be very selfish and self-indulgent in many ways, and quite unappreciative of your and father's kindness and generosity. (*The Letters of T. S. Eliot* 203)

彼が反省しているのは、多くの点で利己的でわがままなので、両親の優しさと寛大さを全く感謝していなかったことである。そこには、両親に対する彼の罪意識が認められる。

そこで、“What might have been”から浮かび上がってくるのは両親に従順であった人生（アメリカに帰国、哲学の研究など）であろうし、“what has been”から浮かび上がってくるのは両親の意に反して選んだ実際の人生（イギリスに定住、文筆の仕事、ヴィヴィアンとの結婚など）であろう。これらの人生は、エリオットとヴィヴィアンの関係についても言えよう。

同じ頃のエリオットは、1917年12月30日付の母親宛の手紙の中で次のように書いている。

I like especially one [the view] of you writing at your desk in your bedroom. It gives one a strange feeling that Time is not before and after, but all at once, present and future and all the periods of the past, an album like this. (*The Letters of T. S. Eliot* 215)

母親が生家の寝室の机で書き物をしている写真を見て、エリオットは、先のこと・後のことや過去・現在・未来を包括した奇妙な時の意識を抱いている。彼にそのように意識させる中心人物が母親である。そうすると、母親は後に“Burnt Norton”で「静止点」として暗に描かれているであろう。

1917年の二通のエリオットの手紙とこの詩で引用した二つの詩行を結びつけてみると、そこから彼の行為について浮き彫りになるのは、両親への罪意識を取り除くことである。その方法は、どのような人生を送っても固執しないことである。そのことは、別居中の妻にも向けられているのである。

*Ash-Wednesday*では母親を中心とした静寂な世界が漠然と感じられた。“Burnt Norton”では「静止点」を介してその世界がさらに明らかになっている。そこには、彼の人生と深くかかわりのある人々（父親、妻）も仲良く存在するのである。

エリオットは、1935年の詩の中で次のような詩行を表現している。

Love is itself unmoving,
Only the cause and end of movement,
Timeless, and undesiring
Except in the aspect of time
Caught in the form of limitation
Between un-being and being. (175)

“Timeless”は「静止点」の無時間性を連想させる。“un-being and being”は，“What might have been and what has been”を連想させる。そうすると、無時間性という時間相の中でしかとらえられない“Love”は、「静止点」としての母親から感じられる慈愛を示唆しているであろう。この慈愛は、彼が生きていく上での原動力となっているのである。

Four Quartets の三番目の詩が“The Dry Salvages” (1941) である。この詩には次のようなことが書かれている。

The river is within us, the sea is all about us;
The sea is the land's edge also, the granite
Into which it reaches, the beaches where it tosses
Its hints of earlier and other creation: (184)

“The river”はエリオットの生家の近くを流れていたミシシッピー河である。そうすると、“within us”の“us”は現在の彼と子供時代の彼を暗に指しているであろう。

この河についてのエリオットの印象が、アメリカの小説家 Mark Twain の *The Adventures of Huckleberry Finn* に寄せた序文の次のような文章に見られる。

..., the River itself has no beginning or end. In its beginning, it is not yet the River; in its end, it is no longer the River.” (xvi)

ここで語られているのは、ミシシッピー河が始めと終わりを超越していること、言い換えれば無時間性の存在である。1917年12月30日付のエリオットの手紙によれば、生家の寝室の机で書き物をしている母親も無時間性の存在であった。したがって、この河の描写はエリオットが心に抱く母親の姿と深く結びついているのである。

“The Dry Salvages”の“the sea is all about us”は、この別荘から広範囲に見えたニューイングランド地方の海である (Boyd 121)。この“us”も現在の彼と子供時代の彼をそれとなく指している。そこで、この海が暗に伝える意味について考察することにする。

エリオットは、この別荘のあるグロスター (Gloucester) という漁港に触れた母親宛の一連の手紙で次のように語っている。

I am glad you are going to Gloucester after all. I could not bear to think of your not being there in the summer. When I come home after the war I should like to be able to go straight to Gloucester—though that will be May, I presume. (Sunday 20 May 1917, *The Letters of T. S. Eliot* 181)

I must stop now. I like to think of you at Gloucester soon. The submarines won't go there! I long to see you, every day. (13 June 1917, *The Letters of T. S. Eliot* 184)

I love to think of you as being at Gloucester. I imagine how everything looks and think of the summers when I was at Gloucester before you and saw you and father coming across the path with your luggage, and climbing over the stone

wall where it is broken down; and going to meet you. (27 June 1917, *The Letters of T. S. Eliot* 185)

You must have been very busy about these things, and I hope you will take a rest now at Gloucester. (1 July 1917, *The Letters of T. S. Eliot* 187)

これらの手紙から判断すると、グロスターの思い出の中心は母親である。この漁港の彼方にある海は、目の前の光景を示すばかりではなく、悠久の昔も思い起こさせる。そこで、この海は、ミシシッピー河と同じように、母親を包む非時間的な永遠性に接する機会を彼に与えるのである。

こうして、われわれは、エリオットにとって思い出深い河や海の描写を通して、「静止点」としての母親の非時間的な永遠性を理解するのである。

“The Dry Salvages”には過去の体験の秘める意義を記述した次のような詩行がある。

We had the experience but missed the meaning,
And approach to the meaning restores the experience
In a different form, beyond any meaning
We can assign to happiness. (186)

われわれがさかのぼる過去の体験は一般的な幸せに帰する意義とは違ったものをもたらすという。これまでの論述から察して、その表現内容にもエリオットの個人的な感情が含まれているであろう。彼は子供時代の自分と一体になって、当時の体験の本当の意義を今になって改めて認識しているのである。その体験の意義は「静止点」となって見守ってくれる母親の尊い存在である。この認識こそは、人生上の苦しみを克服するために彼がたどり着いた結論だと言えよう。

注

1. 拙稿「T. S. エリオットの初期の詩と母親」を参照。
2. “Doris’s Dream Songs”と“Salutation”を除いたエリオットの詩からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁を表す。
3. 拙稿「T. S. エリオットの文学批評と彼のハーバード大学哲学科の不採用」を参照。
4. 拙稿「T. S. エリオットの詩とヴィヴィアン・エリオット」を参照。
5. これら4つの詩の簡単な解説は玉泉 68-70 を参照。
6. 1960年にエリオットは、この地方の海の光景が自分の詩の中に取り入れられていることを語っている (“The Influence of Landscape upon the Poet” 422)
7. 当時も晩年もエリオットは、この河から強い影響を受けたことを語っている (“From a Distinguished Former St. Louisan” 3B; “Letter Cities City Influence on T. S. Eliot” 8S; “The Influence of Landscape upon the Poet” 422)。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Shuster, 1984.
- Boyd, John D., S. J. “*The Dry Salvages: Topography as Symbol*.” *Renascence* 20.3 (Spring 1968): 119-33, 161.
- Childs, Marquis W. “From a Distinguished Former St. Louisan.” *St. Louis-Dispatch* 83.39 (15 Oct. 1930): 3B.
- . “Letter Cities City Influence on T. S. Eliot.” *St. Louis-Dispatch* 86.46 (16 Feb. 1964): 2S, 8S.
- Dante Alighieri. *Vita nuova*. 1992. Trans. Mark Musa. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Eliot, T. S. “Tradition and the Individual Talent.” 1919. *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism*. 1920. London: Methuen. 1928. 47-59.
- . “Doris’s Dream Songs.” *Chapbook* 39 (Nov. 1924): 36-37.
- . “Salutation.” *Saturday Review of Literature* 4.20 (10 Dec. 1927): 429.
- . “To Paul Elmer More.” Shrove Tuesday 1928. Paul Elmer More Papers. Princeton U Library, Princeton.
- . “To Paul Elmer More.” 3 Aug. 1929. Paul Elmer More Papers.
- . *Dante*. London: Faber and Faber, 1929.
- . *Ash-Wednesday*. London: Faber and Faber, 1930.
- . “To Paul Elmer More.” 2 June 1930. Paul Elmer More Papers.
- . “To Paul Elmer More.” 18 May 1933. Paul Elmer More Papers.
- . “To Marianne Moore.” 31 Jan. 1934. Marianne Moore Papers. Rosenbach Museum and Library, Philadelphia.
- . “What France Means to You.” *La France Libre* 8.44 (15 June 1944): 94-99.
- . Introduction. *The Adventures of Huckleberry Finn*. By Samuel L. Clemens (Mark Twain). London: Cresset P, 1950. xii-xvi.
- . “The Influence of Landscape upon the Poet.” *Dædalus, Journal of the American Academy of Arts and Sciences* 89.2 (Spring 1960): 420-422.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1, 1898-1922*. Ed. Valerie Eliot. London: Faber and Faber, 1988.
- Jain, Manju. *A Critical Reading of the Selected Poems of T. S. Eliot*. Delhi: Oxford UP, 1991.
- Lehmann, John. “T. S. Eliot Talks about Himself and the Drive to Create.” *New York Times Book Review* (29 Nov. 1953): 5, 44.
- Pritchett, V. S. “‘Our Mr. Eliot’ Grows Younger.” *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958): 15, 72-73.
- Reid, B. L. *The Man from New York: John Quinn and His Friends*. New York: Oxford U P, 1968.
- Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell, 1914-1944*. Vol. 2. 1968. London: George Allen and Unwin, 1978. 3 vols. 1967-69.

Southam, B. C. *A Student's Guide to Selected Poems of T. S. Eliot*. 1968. London: Faber and Faber, 1994.

古賀元章. 「T. S. エリオットの文学批評と彼のハーバード大学哲学科の不採用」『比較文化研究』(日本比較文化学会) 43 (1999): 111-20.

---. 「T. S. エリオットの詩とヴィヴィアン・エリオット」『言語文化学会論集』(言語文化学会) 23 (2004) : 241-57.

---. 「T. S. エリオットの初期の詩と母親」*Comparatio* (九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会) 9 (2005): v-xxi.

玉泉八州男. 「『エアリアル詩集』」『エリオット』. 平井正穂編. 東京: 研究社, 1967. 全24巻. 1967. 68-70.